

『常にポジティブ思考で』

作家の井上靖さんが、平成2年1月13日の新聞に「揚がらぬ凧」という文章を寄せていました。

井上靖さんは、子どもの頃、凧揚げが下手だったそうです。凧を揚げると、きりきり舞って田んぼに落ちてしまいます。絶望感が田んぼに突き刺さったと言っています。

井上靖さんは、数多くの小説を書いてきましたが、凧のように軽く揚がった小説もあれば、いきなり田んぼに突き刺さった小説もあったそうです。しかし、作家生活を振り返ってみると、軽く揚がった作品をいいともいえないし、いきなり田んぼに突き刺さった作品を悪いともいえない。軽く揚がったのに感心しないのもあれば、地面に突き刺さったのにあっぱれなものもあったということです。

そこで、井上靖さんは、いくら凧を揚げても、その度にきりきり舞いをして田んぼに突き刺さる少年たちに、それが絶望を意味していないことを伝えたい、しかし、伝える術がないのが残念だと言っています。井上靖さんの言うとおりに、失敗は絶望ではありません。

あえて失敗や挫折を好む必要はありませんが、失敗する経験も大事な学びの一つです。試験に失敗したからといって失望し、勉強が遅れたからといって挫折することは、残念なことです。失敗は一つのチャンスを逃したにすぎないのです。失敗したら、その失敗の原因を確かめ、次のチャンスを生かし、努力を怠らずに、最後までやり遂げることが大切です。失敗を繰り返しながらも、その経験を生かし成長の糧となっている場合、その失敗は「よい失敗」と言えますが、失敗をすると他人のせいにしてしまったり、その失敗から何も学ぶことができなく、単なる不注意や誤った判断から失敗が繰り返される場合、それは「悪い失敗」と考えられます。失敗を恐れず失敗から学ぶという謙虚な姿勢を持つことができる人は、確実に成長を遂げられます。

失敗に失敗を重ねながらも後に成功した例の一つとして、即席ラーメンを開発した話が有名です。今や日本の即席ラーメンは日本のみならず、世界30カ国以上の国で食べられており、年間82億食以上愛用されていると言われています。そこに至るまでは、研究者たちが何十年間もの間、麺の揚がり具合、味付け、具の中身など朝から晩まで作っては試食することをくり返し、改善に改善を重ねた結果の代物と言えます。

別の例としては、「ロッキー」の映画で一躍世界的に有名になったアメリカの俳優シルベスター・スタローンは、俳優になるためのオーディションを50回以上受けても合格することができなかったそうです。そこで彼は発想を変えました。たまたま観たボクシングの試合からインスピレーションを得て、脚本を書くことに専念し、書き上がった脚本を映

画会社に売り込み、それが大ヒット映画「ロッキー」を生み出すこととなったのです。しかも、その主演を務め、俳優としての成功をおさめることになりました。50回以上のオーディションに落ち、そこから学び、諦めずにチャレンジをした結果と言えます。

その他の話として、マイクロソフト創業者のビル・ゲイツは、  
「成功を祝うことは素晴らしいことだが、  
失敗の教訓を学びそれを生かすことはもっと大事だ。」

かの発明王トーマス・アルバ・エジソンは、  
「私は失敗したことがない。ただ、一万とおりの  
うまくいかない方法を見つけただけだ。」

これらの言葉が表しているとおり、失敗から学びそれを生かすことが大事なのです。失敗は何で起きるかと言うと、起きる必要があるから起きると言えます。

数多くの成功者の逸話から、その成功の裏には、とてつもない失敗があることがわかり、これから先自分が失敗したとしてもポジティブに考えられそうな気がしてきます。

失敗することを恐れ、なかなか思い切った行動に出られないという人が最近多くなったような気がします。数々の失敗に打ちのめされてきたからなのか、それとも、石橋を叩き過ぎて一歩前に出るという経験が少ないのか、または、ちょっとした失敗でも周りがそれを許さないという風潮が強すぎるのか、その背景には様々な要因があるのですが、これからの時代を生き抜く子どもたちには、失敗があって当たり前、その失敗が自分を成長させてくれるものであり、自分を鍛えてくれるもの、育ててくれるものであるととらえ、むしろ失敗は喜ぶべきものというくらいのポジティブ思考で逞しく成長を遂げていってほしいものです。